

社寺参詣曼荼羅の世界

# 参詣曼荼羅

岩鼻通明

## はじめに

社寺参詣曼荼羅は、中世から近世への過渡期に、突如として集中的に出現した、社寺の聖域とその周辺のにぎわいを活写した絵画史料である。

昨年末の大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』（平凡社刊）の刊行によって参詣曼荼羅をめぐる研究環境は飛躍的に改善された。大判のカラー写真全図により、ほとんどすべての参詣曼荼羅が細部に至るまで観察可能になったのは、たいへんありがたいことである。

同書の出版を契機として、参詣曼荼羅に関する座談会が企画されたり（注<sup>1</sup>）、また、通参詣曼荼羅の読解の試みや個別の参詣曼荼羅分析が急速に進展しつつあり（注<sup>2</sup>）、同書の書評・紹介も出はじめている（注<sup>3</sup>）。

本稿では、まず、参詣曼荼羅とはどういった特徴をもつ絵画史料であるかについて、さらに

従来の参詣曼荼羅をめぐる諸論攷とは見解を異にする点についても論じてみたい。

## 参詣曼荼羅のルーツ

参詣曼荼羅のルーツをめぐることは、目下とこそ、三つの説がある。第一は中世前期以来の宮（垂迹）曼荼羅の系譜の延長とする説（注<sup>4</sup>）、第二は中世の社寺縁起絵の発展とみる説（注<sup>5</sup>）であり、第三は社寺の聖域の案内図として成立したとする説（注<sup>6</sup>）である。

しかし、現実にはこれらの説が対立関係にあるとみるよりも、個々の参詣曼荼羅にはいずれかの傾向が強くにじみ出ていると弾力的にとらえるべきであろう。

たとえば、宮曼荼羅にみられるような社寺境内の表現（ただし、人物が描かれる例は少ない）は参詣曼荼羅にも継承されている。宮曼荼羅は一般に小幅で縦長となっており、礼拝用に作成

されたと考えられるが、富士参詣曼荼羅の場合は同様に縦長で、参詣曼荼羅の中では小幅の部に属しており、宮曼荼羅の系譜に近いものと考えられる。

もっとも、浅間大社本の富士参詣曼荼羅は絹本で、しかも狩野元信の壺形朱印があるなど、西国の聖地を描いた参詣曼荼羅一般とは異質な面が多く、礼拝用に近い性格をもっていたとも考えうる。他の数幅の富士参詣曼荼羅も、その性格を継承して作成されたと思われる。

一方、掛幅形式の縁起絵は参詣曼荼羅と同様、大幅の作例が多く、また絵解きが行なわれたと思われる点でも共通する。しかし、両者の間には表現技法において決定的な差異がある。

縁起絵には、たとえば、高僧絵伝にしばしばみられるように、絵巻の延長として画面を分割し、そこに時間的推移としての絵を描きこむという手法がみられる。要するに、宗派の開祖なり、社寺の建立なりにかかわる縁起が時間の経過にしたがって表現されているわけである。

ところが、参詣曼荼羅では、基本的には縁起にかかわる図像は画面の周縁部に付加的に置かれ、また縁起絵のようにストーリーが時間的経過の中で連続的に描かれるということはない。

参詣曼茶羅においては、そういった時間的推移としての縁起譚が主題となっているのではなく、聖域としての霊場の空間を表現することこそがメインテーマなのである。

ここで想起されるのが、先述の座談会でも話題となった善光寺参詣曼茶羅（注7）である。これは中央に善光寺の聖域、両端に縁起を描いた、参詣曼茶羅と縁起絵の折衷的様式の作例として独特のものである。縁起絵から参詣曼茶羅への移行を考察するには貴重な作例であるが、画面中央に描かれているのは善光寺参詣の風景であり、縁起は周縁部にまとめられていると解釈すれば、やはり参詣曼茶羅と呼ぶのが妥当であろう。

このように、時間的表現から空間的表現へと変化がみられることの裏には、中世的ものから近世的なものへという、大きなパラダイムの変換が存在しているとみてよからう（注8）。

事実、近世に入ると、各地の社寺や名所旧跡を描いた名所図会めいしよずえの制作が隆盛をきわめる（注9）が、参詣曼茶羅はそうした名所図会風案内図のさがけといふべき、聖地の空間表現を意図した絵画史料として位置づけられる。ただし、参詣曼茶羅には図中の文字注記は通例みられな

い。つまり、案内図的性格をもつとはいっても、それは依然として絵解きされることが前提となっていたのであり、あくまでも参詣曼茶羅は中世から近世への過渡期の産物であった。

このような現世的宗教空間の表現がメインテーマとなったのは、おそらく熊野那智参詣曼茶羅が最初であろう。那智参詣曼茶羅は、観心十界図かんしんじゅうかいや仏涅槃図ねはん、熊野権現縁起絵巻とセットで伝来する事例が報告されている（注10）。絵解きの際に、縁起の要素は縁起絵巻、非現世的宗教空間は観心十界図へと分割されたことによつて、那智の現世的宗教空間そのものを描いた参詣曼茶羅が成立したのではなからうか。その表現様式が西国巡礼路に沿う霊場に伝播していったと考えられる（注11）。

### 通絵図分析への歩み

さて、参詣曼茶羅のルーツに関して私見を述べたが、むしろ今後の研究に必要とされるのは通絵図的分析（注12）、すなわち参詣曼茶羅相互、さらには同時代の絵画史料との比較検討である。

たとえば、室町末期以来、京の都の都市景観を流麗に描ききつた洛中洛外図らくちゅうらくがいずが登場する（注13）し、また、近世初期風俗画と称される一連の絵画が出現する（注14）。これらの中には、参詣曼茶羅にみられる社寺の聖域の表現に類似した描写が散見される。したがって、参詣曼茶羅にみる人物と景物（景観表現）の分析に際しては、これら同時代の絵画史料と比較検討を行なうことが不可欠といえよう。

さて、近年絵巻物に代表される中近世の絵画史料研究が盛んとなつてきているが、その中でも人物表現に関する検討が、身分制との関連等のさまざまな視点から進められている（注15）。おびただしい数の人々が画面に登場することが参詣曼茶羅の大きな特徴であるから、もちろん、それらの人物図像の分析は必要欠くべからざるものである。

しかし、従来の研究では、たとえば那智参詣曼茶羅の画中の諸所にみられる白装束姿の道者（注16）、ないし高野聖たけのよのせいや琵琶法師びわはうしといった「異形の者」あるいは縁起にかかわる人物像に注目が集まり（注17）、その他大勢の老若男女の参詣者は十分視野に入りきっていなかったのではなからうか。

また、これらの人物画像の表現は、すでに指摘されているように、絵師の工房で「儀軌<sup>ぎき</sup>」化されており、類似した人物表現を、参詣曼荼羅や絵巻物、洛中洛外図等の画中に、通絵図的に見ることができる（注18）。

けれども、従来の分析は、それらの人物画像はあまりにも画面から切り離された状況の中で、個別に比較検討が行なわれていたのではなからうか。

## 遊泳する人物画像

参詣曼荼羅の主題が聖地の空間表現であるとするれば、その空間を遊泳する人物もまた、そのキャラクターにふさわしい特定の場に配されていると考えるのが妥当であろう。たとえば、別稿で指摘したように、琵琶法師は本堂の脇に、高野聖は鳥居や門の外に描かれることが多いのは、当時の身分制の構造が空間的に反映しているものとみることができる（注19）。

福原敏男氏の見解では、筆者のこの立場に否定的である（注20）が、参詣曼荼羅の主眼が聖なる空間の描出である以上、そこに描かれた人物群も聖域とのかかわりで配置されているとみな

されるのは当然であろう。各人物は聖域に対してどう関係しているかという浄不浄のかかわりの中で配置が定められていくと考える。すなわち、単なる身分上の差異ではなく、聖域との関係の差異においてなのである。工房の絵師たちも当然、さまざまな人々と聖地とのかかわりについての正確な認識をもっていたであろうから。

一方、さまざまな登場人物のスタイルからも諸々の興味深い要素を抽出することができる。服装を例にとれば、すでに柿色の衣の非人の事例は広く紹介されている（注21）。

さらに、服装にとどまらず、登場人物はいろいろな物を手に持ち、あるいは身につけている。たとえば、武器としては、腰刀や弓矢、槍、長刀など多くの種類が描かれているし、扇を手に持ち、あるいは眼前に拡げて置き、ひれ伏して神仏に祈る参詣者の姿は参詣曼荼羅のそこかしこに登場する。

また、梅花や桜花、あるいは柳の小枝を手に下げた童子や若者の姿がしばしば参詣曼荼羅に描きこまれている。ここで、熊野観心十界図に目を移すと、有名な「人生の階段」の部分で同様の人物画像の表現をみることができる（注22）。

これらはまさに「年齢階梯」を示唆する、いわば青春のシンボルの表現とみてよからう。

一方、観心十界図と一対の関係にある那智参詣曼荼羅には、この小枝を手に持つ人物の表現は見当たらない。したがって、この人物表現が存在する参詣曼荼羅は観心十界図の人物画像を典拠としてひき写したものと考えられ、先述のように、西国巡礼の行動範囲内に分布する参詣曼荼羅における、那智参詣曼荼羅と観心十界図の始源性を確認することのできる人物画像であるといえよう。

さらに、人物の動作にも興味深いものがみられる。門前の市小屋で茶を飲む光景や、囲碁に興じる人々など、当時の風俗が参詣曼荼羅には活写されている。聖と俗の接点の場のにぎわい、それは宮曼荼羅には無縁であった表現であり、これまた参詣曼荼羅研究の重要なテーマのひとつといえよう。

このように、参詣曼荼羅における人物画像はきわめて多様であり、同時代の絵画史料と比較しながら通絵図的に検討していく中で全貌が明らかになってこよう。

## 参詣曼荼羅にみる景物

次に、参詣曼荼羅に描かれた景物（景觀表現）としては、山水、建造物、あるいは動植物をも含めることができよう。これら景物についての考察は人物に比べると大きく遅れをとっている。作成年の不明なものが圧倒的に多い参詣曼荼羅の場合、画中の景觀表現を同時代の絵画史料と比較検討することによって、ある程度作成年代を推定することも可能になるだろう。

さて、画中で注目すべき景物としては、別稿で指摘した「滝」と「塔」があげられる（注<sup>23</sup>）。この両者はエリアーデ流に言えば「天と地と地下を結ぶ垂直軸」として機能し（注<sup>24</sup>）、参詣曼荼羅の宇宙を統合する役割を果たしている。

図中に躍動する犬や牛馬、あるいははばたく鳥などの動物も意味ありげに描かれ、桜花や梅花、さらには紅葉した独立樹の表現もみられる。これらは当時の社寺境内の景觀の単なる写生に終わっているわけではなく、人物図像の配置と同様に、秘められたメタファーが隠されており、我々はそれらを読解すべく、試論を重ねていきたい。

同時に、「画面のそここにたちこめている雲

や霞も、単なる自然の描写ではなく、洛中洛外図の場合と同じく、場面転換の目的で使われている「雲烟の技法」なのである（注<sup>25</sup>）。参詣曼荼羅における空間表現は、現実の位置関係を大幅にデフォルメしている（注<sup>26</sup>）。周縁部の俗界は圧縮され、その逆に中央の聖域は誇張されて表現されているが、その歪み（ゆがみ）を隠蔽しているのが、この雲烟ということになる。

このように、参詣曼荼羅に描かれた景物は単なる背景として描かれているのではなく、聖域の表現というテーマと深くかわつていているといえよう。

## おわりに

以上述べてきたように、参詣曼荼羅はきわめて多義的な性格をもつ絵画史料である。それゆえ、参詣曼荼羅の研究には多様なアプローチがあるし、それらが連繫し、統合されて初めて参詣曼荼羅の全容が浮かびあがってくるであろう。本稿はそれに向かつての一里塚にすぎない。

これで、とりあえず第一回の筆を置くが、次回以降は、個別の参詣曼荼羅をとりあげる中で、

通絵図的分析を導入しながら論を展開していきたい。

（いわはなみちあき「人文地理学」）

## 注

（1）黒田日出男・徳田和夫・西山克・福原敏男「座談会 社寺参詣曼荼羅の世界」『月刊百科』一九八八年五月号。

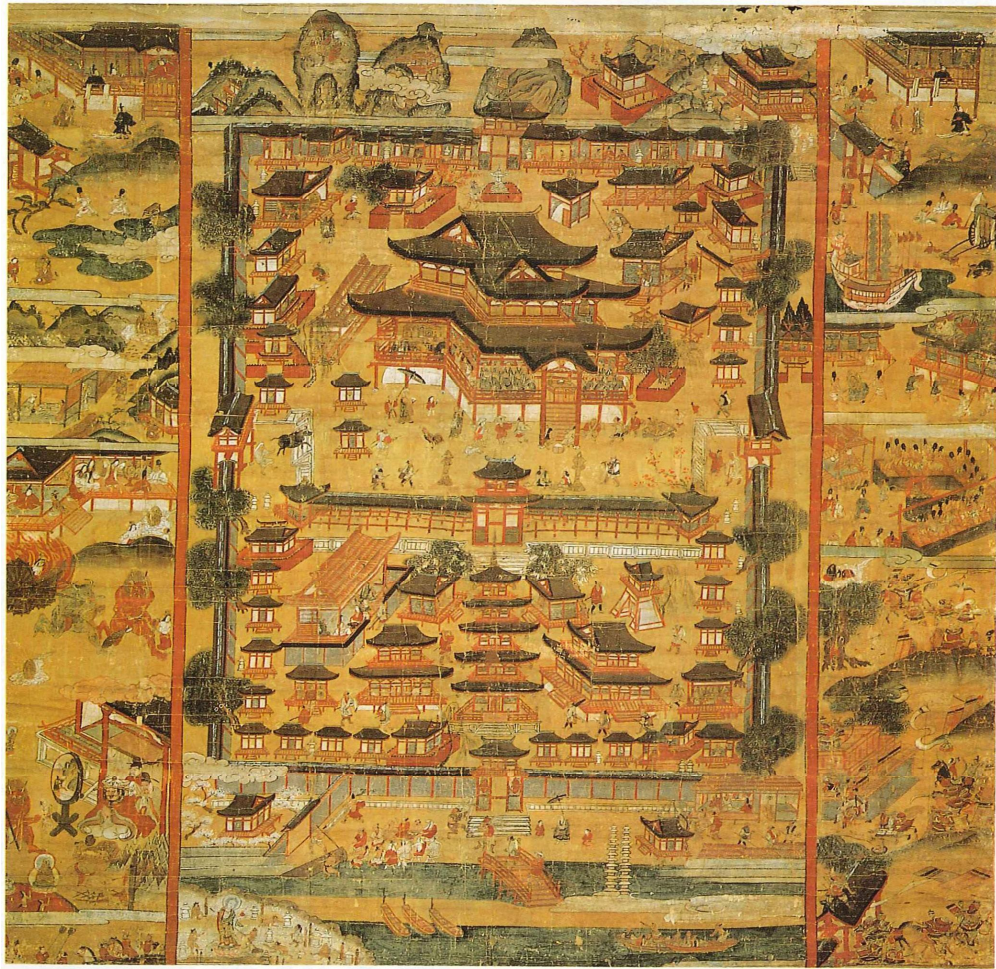
（2）西山克「那智参詣曼荼羅諸本の系統と明星院本」『岡崎市史研究』一〇、一九八八年三月。徳田和夫「床下神の物語」『国語国文論集』一七、一九八八年三月。徳田和夫「牛に引かれて善光寺参り 譚の軌跡」『絵解き研究』六、一九八八年六月。黒田日出男「参詣曼荼羅の不思議」『清水参詣曼荼羅』の読解、『週刊朝日百科』日本の歴史別冊 絵画史料の読み方、一九八八年七月。福原敏男「先山千光寺参詣曼荼羅について」『大阪市立博物館研究紀要』二〇、一九八八年二月。福原敏男「社寺参詣曼荼羅について」『へるめす』一五、一九八八年六月。拙稿「参詣曼荼羅の読図に向けて」『芸能』二九 十、一九八七年十月。

- (3) 拙稿「絵解き研究と図録」、徳田和夫「稔りの年 付『社寺参詣曼荼羅』の刊行を欣ぶ」、『絵解き研究』六、一九八八年六月。
- (4) 中村興二「社寺参詣曼荼羅の成立と展開」『本地仏の総合的研究』科研費報告書、一九八四年。また、山折哲雄「仏教的世界観と民俗的他界観」(『仏教民俗学大系』3 聖地と他界観) 名著出版、一九八七年十二月) は垂迹曼荼羅の「山」モチーフに「海」モチーフが加わって、参詣曼荼羅が成立したとするが、既に山と海のもチーフは中世の莊園絵図に頻出している。
- (5) 藤沢隆子「参詣曼荼羅の成立」『近畿地方を中心とする霊場寺院の総合的研究』元興寺文化財研究所、一九八五年。
- (6) 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書」『藤井寺市史紀要』七、一九八六年。
- (7) 前掲注1。
- (8) 社寺参詣の旅そのものも大きく変容していると考えられる。『週刊朝日百科日本の歴史75、旅 信仰から物見遊山へ』一九八七年、拙稿「道中記にみる出羽三山参詣の旅」『歴史地理学』一三九、一九八七年、参照。
- (9) 矢守一彦『古地図と風景』筑摩書房、一九八四年。
- (10) 荻原龍夫『巫女と仏教史』古川弘文館、一九八三年。大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年。
- (11) 前掲注4の山折哲雄氏の指摘のように、那智参詣曼荼羅に「海」モチーフが付加されたのは、いうまでもなく「補陀落渡海」信仰、いいかえれば海上他界を強く意識した結果であろう。この点においても那智参詣曼荼羅の始源性が注目されるが、一方、西国霊場の他の参詣曼荼羅においては海上他界の表現はほとんどみられず、「海」モチーフは換骨奪胎された感があり、現世空間の表現がメインになっている点に注意しておく必要がある。
- (12) 絵図および絵画史料の分析の枠組については、葛川絵図研究会編『絵図のコスモロジー』上巻、地人書房、一九八八年、参照。
- (13) 今谷明『京都・一五四七年』平凡社、一九八八年。高橋康夫『洛中洛外』平凡社、一九八八年。
- (14) 武田恒夫『近世初期風俗画』至文堂、一九六七年。
- (15) 黒田日出男『姿としぐさの中世史』平凡社、一九八六年。保立道久『中世の愛と従属』平凡社、一九八六年。
- (16) 黒田日出男、熊野那智参詣曼荼羅を読む『思想』七四〇、一九八六年。
- (17) 徳田和夫「中世の目、中世の耳」『国文学』三二七、一九八七年。
- (18) 西山克「社寺参詣曼荼羅についての覚書」『藤井寺市史紀要』八、一九八七年。
- (19) 拙稿「西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現」『人文地理学の視園』大明堂、一九八六年。
- (20) 大阪市立博物館編『社寺参詣曼荼羅』平凡社、一九八七年。
- (21) 前掲注15参照。
- (22) 前掲注10参照。
- (23) 前掲注19参照。
- (24) エリアーデ『聖と俗』法政大学出版局、一九六九年。
- (25) 水津一朗「文化景觀のコード」『空間・景觀・イメージ』地人書房、一九八三年。
- (26) 前掲注19参照。





千光寺参詣曼荼羅(部分) 兵庫県淡路島の先山千光寺の縁起や参詣のありさまを描いたもの。犬に追われる琵琶法師(下部)や笈を背負った高野聖など、さまざまな姿の参詣人が書き込まれている。千光寺蔵



善光寺参詣曼荼羅 中央部に参詣曼荼羅、左右の縁辺に善光寺如来絵伝を描く、小山善光寺所蔵。図版はいずれも平凡社刊『社寺参詣曼荼羅』より。